

国際協力特別賞

「ケレケレ」、それはマジックワードー未来への共生のためにー

コリア国際学園高等部 2年
文 世奈

私は、約1年をフィジー共和国で留学生として過ごした。過ごしてみて辛かった事も、今となっては素晴らしい経験をする事が出来たと誇らしく思う。彼の地には、「人々が共に生きるための心得」があった様に思う。

かつて英国の植民地であったフィジーには、陽気でのんびり屋のフィジー人が約6割、インドから強制連行された働き者のインド人が約3割マイノリティーとして暮らしている。この様に、性格が違う2つの民族だが、現地の人達に共通しているのが、物を所有する事に無頓着なことだ。それを象徴するのが、フィジー語の「ケレケレ」で、「お願い」に当たる。たとえ知らない人でも、これを言ってお願ひすれば、食べ物等を分けてもらえたりする事の出来ちゃう、正に「魔法の言葉」なのである。ある日、学校で右隣の子にペンを貸してほしいと言われ貸したのだが、ありがとうと言って返してきたのは、左隣の別の子だった。いわゆる初めての“ケレケレ体験”をした私は、予想外の結末に、少しびっくりした。でも、なぜか嫌な気がしないのは、彼らが笑顔で私に感謝をしてくれたからだ、と、すぐに感じて、ほっと嬉しい気持ちになった。しかし、ケレケレを何度も繰り返されると、私も嫌気が差し始めてくる。しかし、同時にある事に気づいた。私達は知らず知らずの内に、自分の所有物に対しての“執着”が、大きくなってしまっているという事実である。つまり、きっちりとした傾向の日本人は「自分の物」という線引きにこそ、こだわり過ぎてしまう傾向にあるという事である。逆に、フィジーの人達は、同国人だけでなく、目の前にいる人を巻き込んだ「共有文化」が、強く根づいている為、自分も受け取り、それと同様に見返りなしに、相手に与える事が出来る。それに、ケレケレで貰ってばかりいると、彼らも失礼と感じるので、お互い“間合いの取れた”ケレケレが可能である。つまり、フィジー人が皆、親切というよりは、これが“フィジーという生き方”なのである。

それと、もう1つ心に残ったエピソードがある。私はインド人の家族の元でホームステイをした。ある日、食事を終えて日本地図を描きながら日本の事を彼らに話していた。とても興味深そうに聞いてくれた後に、彼らの祖先についても、私に話をしてくれた。その中で「私達は白人に騙されてここに来たのだ」と、ある種過激な言葉を、さらりと、あっけらかんに、しかも終始笑顔で言ったのだ。私はそのギャップに非常に驚いた。なぜなら、私は在日コリアンとして生まれて、コリアと日本の文化をバランス良く受け継いだ。その中で、世間の一部の人達による、マイノリティーへの対応が、近頃特に、問題となっている事に心を痛めていた。なので、このファミリーの反応は凄く新鮮であり、同時に、ハッと気づかされた瞬間だったのである。彼らは過去を忘れてはいないが、許している。そして、彼らの視点は確実に未来を向いている。私はこれを見て、まずは自分の身近にいる人に対して、「みんな一人ひとり違う」という事から、今一度確認したいと思った。過去のルーツを踏まえながら、次世代に向けた解決の方向に目を向ける事から、始め

る事が大事だと、気づいた瞬間だった。しかし、お互い理解し合って、国境の壁を越えようとしても、実際に難しいところがある。また、理解しようとするあまり、相手にばかり合わせようとする事も、国際人の資質とは言えないであろう。これらを認知した上で、国際人として振る舞う姿勢こそが、大事だと思う。時には、両者がせめぎ合う事もあるだろうが、それも、「共に生きる事」なのである。今まで相手が、どれだけ害を加えてきたとしても、好き嫌いを表明する自由を振りかざすだけでなく、未来の自分達がどうありたいかを思い描きながら、進むべきではないだろうか。